

小林正泰『関東大震災と「復興小学校」 ——学校建築にみる新教育思想』

畑 中 祐 樹・古 仲 素 子

0. はじめに

「学校」と聞くと、次のようなイメージを持つ人が多いのではないだろうか。すなわち、白塗りのコンクリート造りの3～4階の一直線型の建物。南向きの玄関を入ると無機質な階段を何段もあがり、北側に据え付けられている廊下を走ってこれまた南向きの教室に入る。黒板に向かってきっちりと並べられた座席の一つについて、教壇で語る教師の話を静かに耳を傾けるように仕向けられる。——これこそ日本の小学校から高校までのほぼすべての学校に共通する「定型」のイメージである。そして本書の主役である復興小学校こそ、この「定型」のルーツなのだ。では、この「定型」に意味などあるのだろうか。そう考えてしまいがちであるが、本書を読むと、その意味も明らかにされてくる。

本書は、本コースの先輩である小林正泰氏が2011年に学位を授与された博士論文「復興小学校」の教育学的研究——大正・昭和初期における学校・建築と地域社会」に加筆修正を行ってまとめられたものである。

「復興小学校」とは、大正12(1923)年の関東大震災によって焼失した東京・横浜両都市の小学校に対して、不燃性の鉄筋コンクリート(略称RC)三階建構造で復興・再建した学校建築を指し、本書では特に東京市内の117校が研究の対象となる。

ここに登場するRC(三階建)小学校というのは、戦後以降の学校建築にも連なる定型的なものであり、それ自体が学校の閉じた構造を表しているとされている。現代の教育をめぐる言説においては、子どもをのびのびと育て、地域社会にも「開く」オープンスクール構想や、フーコーのパノプティコンとしての学校批判言説のような形での学校の強迫性に対する批判が提議されており、そのどちらにおいても「学校空間の文化化、オープン化」(6頁)が主張されている。しかし、そこで批判の対象とされているRC三階建は、その問題点が(あったとしても)十

分に明らかにされてはいない(序章第1節)。ゆえに、その原型となった復興小学校の総合的な分析こそが、戦後の学校建築の流れをたどる上でも重要であるという視点から、著者は本研究に取り組んでいる。

1. 本書の紹介

まず、本書の流れを確認しておきたい。序論で問題の所在が示され、学校建築史や復興小学校先行研究の整理が行われる。本論は7章構成になっており、1章で震災前の状況を確認した後、2・3章で震災の発生とそれに対する復興への取り組みを行政側からの視点を中心に取り上げマクロ的な分析を試み、4～6章では小学校を取り上げよりミクロな視点での考察に移る。そして7章では復興小学校の形成の根底にあった教育思想を中心に分析している。さらに終章と補論が付され、本書の整理や残された課題についての問題提議が行われている。

本論は、震災が発生する前の東京市やその小学校についての状況整理から始まる。これは、復興小学校を単独のものとして見るのではなく、社会背景に位置付けるために必要な作業である。震災が発生する1920年代とは特に、人口増による教育環境への関心の高まり、産業構造の変化における科学教育へのまなざしの強まり、新教育への転換、子どもに限らない社会教育のめざめ、など社会と教育をめぐる動きにも変化が現れる時期である。また、建築界においても学校の耐震強化の動きも活発になることが示される。このようなさまざまなアクターが入り乱れての学校に関する議論は、復興小学校が震災前の小学校と全く異なるものとして登場するものではなく、むしろ発生以前からの社会問題を受け継ぎながら成立したことを予感させる(第1章)。

そうした中、関東大震災が発生する。東京市の市立中学校も全196校中117校が焼失するなど甚大な被害を受けたが、地震発生時の市内小学校の様子や、当時の教師たちの日記などをもとに克明に示され、

必死に学校や子どもを守ろうとする姿が描かれている。学校を含め東京市全域が壊滅的な被害を受けたが、いち早い回復を目指し帝都復興計画が策定され、小学校についても復興が計画される(第2章)。その復興プランでは、各小学校の学級数や、RC造三階建の規定、衛生環境に配慮した近代的諸設備の設置など、細部にまで及ぶ方針が示されている。このプランは、建築側の学校建設課が、教育側の学務課をリードしてなされたものであるが、建築側の「理想」と、教育者の立場からの要求や外部環境等の制約などの「現実」の間でどの程度実現されていくのかが復興小学校117校のデータを用いて明らかにされる。ここにおいて、復興小学校の学校建築に教育的要素が含まれ、地域社会とのつながりが重視されていることが浮かび上がってくる(第3章)。

以上の部分では復興小学校について、マクロな視点からの考察が続いたが、4章以降では復興小学校の実例を2校取り上げて、ミクロな視点からの分析へと移る。1校目の錦華小学校(現・千代田区立お茶の水小学校)の考察では、「新教育的教育実践の機能だけではなく、保守的な教育観がない交ぜになった」こと(137頁)、および教育活動を通じた地域社会全体との連携の存在などが明らかにされる(第4章)。2校目の練屏ねりべい小学校(現・台東区立平成小学校)においても、地域社会との接続、教員らによる新教育的教育観の存在などがあげられる(第5・6章)。この2例を通して、3章で著者が提示した史像が実証される形となっている。

ここまでは学校建築に焦点が当てられたが、それに続く章ではその背景にある思想の考察に移る。当時の学校建築に大きく寄与した古茂田甲午郎と佐野利器、さらには当時の実践的教育家であった木下竹次を中心に、彼らの中にある新教育的な教育観について考察をし、学校建築との結び付きを展開している。大正新教育観を反映した復興小学校の試みはしかし、災害や教育政策の事情などもあって戦前においては途絶えてしまった。そしてそれは、その後も実現されることなく戦後へと持ち越された「未発の契機」であるとして本論が締めくくられている(第7章)。

本論は以上であるが、続いて、このような新教育観を含んだ学校建築がオープンスクールの萌芽でもあることが提示される。更に復興小学校の限界、教育学が学校建築にいかにかに学問的アプローチをおこな

うのかという問いを投げかけ(終章)、さらに今後に続く課題としてオープンスクールを軸に据えた学校建築のあり方についての議論を展開しつつ本書が閉じられる(補論)のである。

本書中で展開される議論の緻密さ及び細部にまでおよぶ史料の収集・分析などを取っても、本格的な研究書であることは言うまでもない。その一方で、文章や議論の進め方はとても丁寧であり、専門家でなくても手にとって読めるわかりやすさもある。だが、その奥には、非常に重要かつ難解な論点が存在する。以下ではその点についての検討を行いたい。

2. 新たな復興小学校像

本書では次の点において従来の学校建築史像の塗り替えが行われている。すなわち、戦前の時期に(1)学校建築の教育的機能と(2)地域の中心としての小学校という思想が存在していた点である。これらは、復興小学校の成立に関して建築(行政)・教育実践(教師)・地域社会の三者間の関係に注意しながら考察することによって初めて浮かび上がってくる論点である。

2-1 学校建築の教育的機能

「戦前の学校建築には教育的配慮はなされていない」というのが従来の学校建築史における通説であった。本書に登場する長倉康彦¹⁾も、その著書において戦前からの学校建築を批判的に考察している。長倉(1973)は、戦前の教室の寸法を取り上げて、その根拠を「机の配列に都合よい幅とか、先生が一望のもとに生徒を掌握し声の通る距離¹⁾」に求めていて、画一的かつ合理的な部分にその決定の要因を見ている。このように、戦前の設計に基準は存在したが、それは画一性と「質素・堅牢・衛生」を重視したものであり、そこに子どもたちの学びのための教育的な配慮はないととらえられてきたのである。

しかし著者は、戦前の復興小学校が実は、一つ一つに教育的要素が盛り込まれた末の設計であったことを指摘している。その中心となるのが、学校建築課が掲げた建築プラン(第3章1節)である。このプランにおいては、校舎内外の設計に関しての細かい指示が出されている。例えば、教室面積や窓面積、光線条件や教室の私プライベート性を尊重するための廊下側窓

枠の高さの規定、特別教室や屋外体操場、運動器具、砂場、プールや動物飼育設備等の諸部分。これらは、全て教育実践を考慮に入れてのものとなっている。また、以上挙げたようなプランが、「結果として」教育的になったのではなく、最初から意図的になされたということは、建築の中心となった佐野利器・古茂田甲午郎らの思想をたどることで明らかになる(第7章1、2節)。

建築に携わったのは建築家ら行政側だけではない。練屏小の事例で取り上げられているように、教師側の要望も盛り込まれている。この事例を見ると、教師たちは、教室の配置や構造の変更、教壇の撤廃、さらには授業のための設備や備品要求までを行っている。もちろん実務的・経済的合理性を考慮したものもあったのだろうが、それぞれの案件がみな、教育的観点、それも「新教育」の視点からなされたものであることが分かる。しかもこれらの要求は教師集団による全校研究体制のもとになされ、校長以下、新教育への関心の高さがうかがえる。

以上見てきたように、復興小学校の学校建築は建築側と教師側、それぞれの教育観が融合して設計されたものであった。時代的な事情、予算的な都合など制約も多々あり、全てが「新教育」の名のもとに行われたわけではないだろう²⁾。しかし、両者の真摯な思いのもと、復興小学校が実務性だけを重視して子どもの学びに目を向けない空間では決してなかったということは、本書の記述から十分に明らかになった。設計における個々の微細な変化の中に教育観を読みとるこの作業は、「完成された平面図を眺めているだけでは読みとれず、学校現場の史料を利用者の視点で読み解くことによって、はじめて明らかにすることができる」のである(212頁)。

2-2 地域の中心としての小学校

戦前の学校は地域との切断という側面が強いものとして捉えられていた。本書でもその経緯が示されているわけであるが、学制公布以降、当初は地域との結びつきが強かった小学校も、その後の教育政策の進展の中で次第に地域から分断されてきた。そして、旧来の学校と趣を異にする復興小学校は、その見た目の圧迫感や異質感を含めて断絶をさらに強化した、というのが従来の通説であった。では、本書ではこの通説にどのように応答しているのだろうか。2-1で取り上げた学校建築の教育的機能が建築課

(行政)と教育実践の間で織りなされたものであるのなら、今度は更に地域社会も含めた動きをたどることでその実像が明らかになる。

再び建築プランに着目しよう。屋内体操場は講堂と兼用で地域の中心施設としての役割を担うものとなっている。また、狭小な校地面積を補うためにも隣接して小公園を設置し、学校教育における利用を前提とした一体的な作りになっていて、植えられる植物も、理科教育を考慮したものとなっている。これら施設は、前者が今の体育館、後者が校庭に準ずるものと推察されるが、いずれも最初から地域との共有が想定されていたことがうかがえる。

学校に対しての地域社会の反応はどうだったのか。錦華小・練屏小の事例ともに、後援会組織が結成され、寄付金を募って学校に援助を行っている。その際に、学校に購入させる備品の内容にも影響を与えている。その備品には、新教育の狙いを持ったもの、さらに、地域の社会教育活動のためのものもあったようである。このような備品を用いるなどして、地域の校友会や青年団などが結成され、学校を活動の場として利用していたという事実も描かれている。

つまり、この時点で、教育実践がそれ自体単独に存在したわけではなく、地域社会の支援があって成立したということ、一方で地域社会も単に学校の後方支援にとどまらず、自らも学校を利用して社会教育活動に参加していたということがうかがえる。そこで明らかになるのは、地域と一体化した復興小学校の姿である。

ここに、建築者・教育実践・地域社会の三者の立場からの動向を眺めることで、復興小学校は従来のイメージとは異なった姿を現している。その姿は、戦後のオープンスクールと対立するものではなく、「新教育」思想と地域に開けたという点で、むしろその萌芽的な要素を含んだ、連続的なものであった。もちろんそこにはさまざまな限界はあるが、「震災という非常事態、明治憲法下における教育体制、あるいは学校建築研究の未成熟といった様々な制約や前提条件がありつつも、学校を開き、教育環境を改善しようとする意識や具体的なアイデアは評価されてしかるべきである」(299頁)。現代に連なる定型の学校の中にそのような姿を確認することは、今この時代の学校建築を考える上でも大きな意味があり、現代の学校を見る上での重要な指標となる。

(畑中祐樹)

3. 教育史叙述における「モノ」と人との関係再考

著者は終章の末尾で触れるにとどめているが、学校建築とその背後に存在した教育思想および社会状況との関連を読み解いた本書の試みは、教育における「モノ」と人との関係を捉える上でも、非常に意義深いものであるように思われる。佐藤秀夫は、学校での教授や学習を捉えるにあたって、ノートや鉛筆、机・椅子、制服、校舎や教室、運動場などの「モノ」、すなわち物的条件の存在に着目した³⁾。このうち、本書で検討されている小学校校舎は、さしあたり「物的環境」とでも位置づけられるであろう⁴⁾。佐藤によれば、物的条件と人々が行う教授・学習との間には、物的条件の質によって「表現や伝達のありかたが拘束され規制される」側面がある一方で、「新しい物的条件の出現が新しい思考の生成を可能に」したり、「新しい思考がそれに一層ふさわしい物的条件を求めて作り出し」たりする⁵⁾、いわば往還的な関係が生じるという。

上記で述べたような佐藤の捉え方は、学校教育における物的条件そのものに着目することで、その背景に存在する制度や思想および、それをを用いる人々の営みを架橋しようとしたという点で非常に重要である。しかしながら、そのような「モノ」と人との間に存在する往還的な関係を捉えることは容易なことではなく、その具体的な方法についての議論も、これまで充分になされてきたとは言えないのではないだろうか。

物的条件それ自体が伝えることには、一方ではそれを構成する素材・形状・質感等、様々な要素が考えられるが、他方で、モノ史料だけで読み取れることには、やはり限界があると言わざるを得ない。さらに、その物的条件がいかなる意図および状況のもとで作られ、実践の場においてどのように用いられていたのかという点を示す文書史料が、揃って残されているとも限らない。

例えば、戦前の日本における幼稚園建築の成立および展開過程を明らかにした永井(2005)⁶⁾は、教育施設と教育実践および地域社会との関連を描いたという点で、本書とも問題意識を一定程度共有するものであると考えられる。永井の研究は、明治期から

昭和期の16の園舎の個別事例を検討し、園舎の図面や文書・写真史料等から、当時の幼稚園における教育実践を支えた、園舎と地域のありようを浮かび上がらせようとした労作である。しかし、各園舎において実践が具体的にどのように行われていたかについては、「取り上げられる教育実践史料は全体的に少なく、園舎形態から実践のあり方を推察して結論を導いている箇所が多々認められ」、「同じ史料から別の推察が成り立つとすれば、史料解釈の妥当性も問われるだろう」という批判も出されており⁷⁾、建築物そのものから当時の状況を実証的に解明することの困難さがうかがえる。

以上の点に鑑みると、本書は、関東大震災前後における東京市の小学校をめぐる全体的な状況をふまえた上で個別の小学校の事例を取り上げ、さらに、当時の学校建築をめぐる思想にも目を配ることによって、これまで述べてきたような「モノ」と人との関係を非常に丹念に描出したものと見ることができる。とくに、個別の事例を検討した箇所では、校舎の建設段階において教師や地域の人々の様々な意見が反映されていた点のみならず、完成した校舎を上記の人々が実際にどのように活用しようとしていたのかという点にも注意が払われており、人が「モノ」に対して働きかけ、活かそうとする側面を描き出したという点で、特筆に値する。

ただし、著者は本書全体を通して、当時の復興小学校が持っていた、児童図書室の設置(131頁)に見られるような「新教育的」側面に対し、国家主義的な側面、例えば「奉安所や屋内体操場の奉掲所、あるいは作法室や校内神社といった学校設備」を「保守的」と位置づけている(137頁)。しかし、この評価に関しては、教育勅語等に規定された当時の学校教育の状況を考慮すると、やや疑問も残る。当時の小学校建築における「新教育的要素と統制的忠君愛国的要素」の並存——本書では「錯綜」(238頁)と表現されているが——をどのように捉えるかについては、戦前の学校教育の持つ性格をふまえながら、より慎重に考察する必要があるのではないだろうか。

とはいえ本書は、学校建築という物的環境に着目することで、その背後にある、教育に対する様々な社会的要求を捉え直す可能性を再認識させてくれた、刺激的な書であることは疑いない。著者の今後の研究のさらなる発展に期待したい。

(古仲素子)

4. 現代への示唆

—学校空間の両義性という視点から—

著者も復興小学校の限界についての部分（終章第2節）で述べているように、復興小学校、ひいては現代の（定型的な）学校建築に、閉鎖的な側面が存在することは否定できない。また、当時では限界があった部分も、現代であれば改善することが可能な部分もある。「生活空間としての学校」というように、学校の内装や構造を変更し、より生徒・教職員らが圧迫感を感じない造りにすることは、学び・生活の場の環境整備という観点からは望ましいものと言えるだろう。

一方で、教育という営みの側面から考えると、そこにはより複雑な問題があるのではないだろうか。本書でも登場した、戦前の小学校を「教育的でない」と考えた論者たちの主張は批判の理由を「授業の画一性、合理性」のみが重視されるという部分に置いていた。ここで彼らが主張するのは、「新教育」観から見る主体的な学びと、従来の一斉授業形式に見える教授主導の教育の違いである。ゆえにここでは主体的な学びを与えるような学校建築の構造が目指されるべきであると解釈できる。

しかしながら、学校空間を用いて行う主体的な「学び」とは、実際にはどのようなものなのだろうか。著者はこの点に関して批判的視点を交えつつ指摘している。「復興小学校では、「総て」が教育的に機能するという教育的合理性のもとに、建築の隅々に教育的意図が張りめぐらされた環境だともいえる。これは子どもの視点からすれば、学校空間のすべてが大人の教育的意図のもとに管理され、子どもが自由に利用できる「隙間」（アジール）がないとも解釈できる」（306頁）。ここでは復興小学校に関しての言及であったが、現代の学校についても同じような示唆が可能であろう。学校という空間全てに「教育」——あるいは大人たちが主導する「学び」と置き換えてもよい——が入り込むことが、ここで主張されている主体的な「学び」の裏側であると考えてもよい。子どもたちは、大人の教育的意図が込められていない「無目的な隙間」を利用して自分たちの自由な空間を生み出す。そこで行われる営みもまた、「学び」と言えるだろう。しかし、学校のすべてを大人

の手による、大人の目が届く「教育空間」にすることで、このような可能性が失われることにもなる。

ほぼ無条件で肯定されうる主体的な学びさえも実は大人の都合のよいように「従属」させる危険性もはらんでいて、学校という空間を開いたものにするということは見方を変えれば、そのような従属化を目的とした教育の発展につながるという可能性もあるのではないかと⁹⁾。そうであるのならば、単に学校を開く、教育的に意味のある場にする、というだけではなくて、そのことによる負の側面についても考えた上での慎重な議論が必要になろう。

また、学校を生活の場として同化させてしまうことがどこまで有効なのか。再び著者の言葉を借りると、「ポストモダニズムの思想を経由した現代においては、近代学校空間にすべての子どもを無条件に適応させる発想には限界があることが露呈していると言えるだろう。これは、いかに「子ども中心」のオープンスクールであったとしても、「近代学校」という制度の枠内である限り、弥縫策にすぎないという見方もできる」（318頁、傍点は引用者）。

学校が、その存在意義が自明なものでなくなってきている現代において、ある種の不自然な構造を保ったままにしておくことも、今後の学校建築の中で逆説的に考えられるべきではないのだろうか。とりわけ、政策面での教育・学校の重視が叫ばれている昨今、学校という場を、子どもを完全に取りこんでしまう空間にすることが有効なのかどうかを含めて、再考すべきではないか。

著者は本書において、学校建築のオープン化に慎重な姿勢も示していて、現代の学校建築における「教育」の無条件的な肯定に一石を投じるという点でも、我々に示唆を与えてくれているように思える。

5. むすびに代えて

—これからの学校建築と教育を考えるために—

本書は復興小学校の研究書であると共に、その中には「教育学研究としての学校建築史」という狙いがある。学校という空間を、建築と思想の両面からとらえていくことは、教育実践にも示唆を与えるものであるだろう。学校建築研究のこれからの課題とはなにか、著者自身の言葉で締めくくりとしたい。

学校建築が子どもの「学び」や「育ち」にいかなる作用を及ぼすのかを究明し、その背景に大人や社会のどのような教育的意図が込められているのかを明らかにする。そしてそれらの分析を踏まえた上で、子どもにとってどのような教育環境が望ましいのかを追求することである。ただし、教育学において、学校建築研究がほとんど蓄積されてこなかったこともまた事実である。したがって、教育学が学校建築に対していかなる学問的アプローチを行うのかが、今後の大きな課題として残されている（303頁）。

（畑中祐樹）

注

- 1) 長倉康彦『開かれた学校——そのシステムと建物の変革』日本放送出版協会、1973年、28頁。
- 2) 著者は練屏小の事例で松谷校長の教育観を取り上げ、新教育的教育観が統制的忠君的要素と錯綜した、という留意を述べている。
- 3) 例えば、佐藤秀夫「『もの』と教育、学習との関係史」（『教育の文化史2 学校の文化』阿吽社、2005年、第2部）や佐藤秀夫「学校文化のモノ・コト・語り」（『教育の文化史4 現代の視座』阿吽社、2005年、第2部）など。
- 4) ただし、近年では、校舎や教室などの空間的な場を「モ

ノ」として扱うことに対する批判も出されている。例えば倉石らは、従来の研究は教育を構成する「内的条件」に教育内容や教育思想を位置づけ、それ以外の「外的条件」を一意的に「モノ・コト」として単純に二分してきたと述べ、学校のモノ・コト叙述を学校に「住まう」という視点から再構成することを試みている（倉石一郎ほか「方法としてのモノ・コト叙述—学校研究の新たな地平」日本教育学会第67回大会一般研究発表、2008年8月29日）。

- 5) 佐藤秀夫『ノートや鉛筆が学校を変えた（学校の文化史）』平凡社、1988年、15-16頁。
- 6) 永井理恵子『近代日本幼稚園建築史研究—教育実践を支えた園舎と地域』学文社、2005年。
- 7) 湯川嘉津美「書評 永井理恵子『近代日本幼稚園建築史研究—教育実践を支えた園舎と地域』を読んで」『日本教育史研究』第26号、2007年8月、94頁。
- 8) 田中智志は、〈教育〉が本源的に自発化と従属化の両方面を目指させるものであるというパラドキシカルなものであると説いた（田中智志編『〈教育〉の解読』世織書房、1999年、16頁）。今回の議論で考えると、学校という空間の中での「学び」も、大人が意図したものとしてなされるのならば、子どもたちを服従させていく、それも本人たちはそれと気づかないわけであるから、より心からの従属を招く、という結果になるのではないだろうか。